



むかし、むかし、ずっとむかしのじとや。  
湯屋村の近くに、あたたかいお湯がポコポ  
コと湧き出でてゐる小さな壺があつた。そいつな。

「あ、いい気持ちも」

「近い所に、こんなお湯があるのよ、ありがたいことさ」

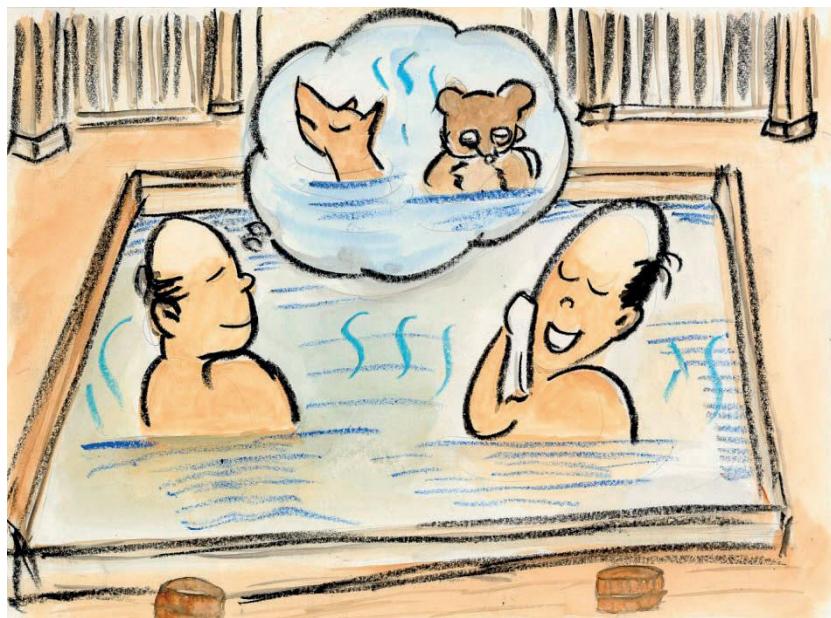
「ほんとやなあ。ありがたいこっちも。湯につかってると疲れとれるのよ」

「なんでも、お湯の中に薬がついて、身体にいいわよ」

「昔は、ケガをしたタヌキやキツネも、このお湯に入って傷を治したわよ」

「それを見た昔の人が、ここに風呂場をうえたんやなあ」

村の人たちは、連れだって、そのお湯につかり、たんば仕事の疲れをとつたりしていた。





といひが・・・ある年夏のいひ。

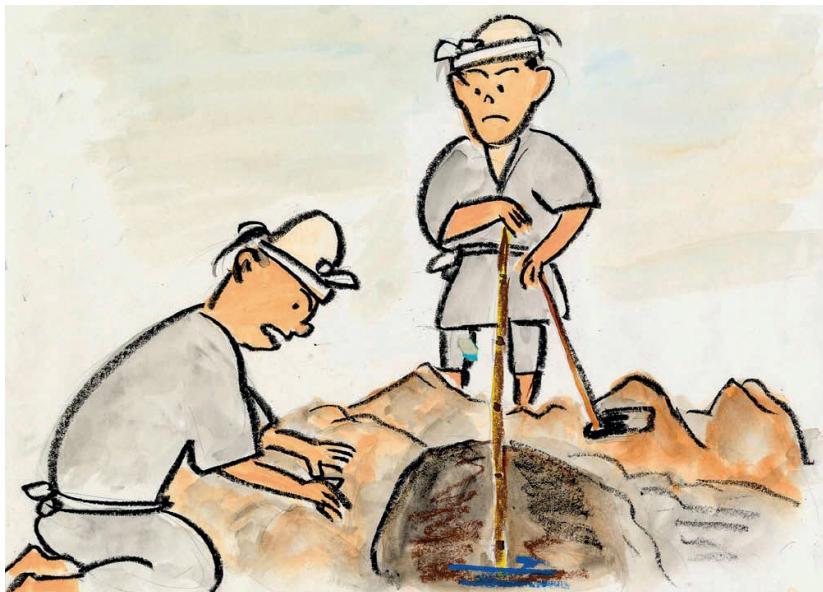
これまでに見たことか、聞いたことない  
みつた大水が出て、煙をたんぽを押し流し、  
ぬ瀬のわき田へいのひも土砂で埋めてしまつた。

大切な楽しみがなくなった村の人たちは、  
どうしたものかと悲しんだ。

そうして、もう一度お湯が出んかと暇を見  
つけでは、お湯のわき出たあたりを掘りかえ  
してみた。

そんな人たちの中に、  
辰口村の源助と小平  
という兄弟がおった。





温泉掘りの話は、たちまち近くの村々にも  
聞こえ、しまっては、金沢の町の商人たちま  
でが、はるばるやって来た。

ところが、じこを掘ってもお湯は出ん。

「じんだけ掘っても、温泉なんか見つから  
んなあ」「

「やつやめてしまつか

その内、一人減り二人減りして、いつのま  
にか、みんな温泉を掘るのをやめてしまつ  
た。

それでも、源助と小平兄弟だけはあきらめ  
ずに掘っていた。

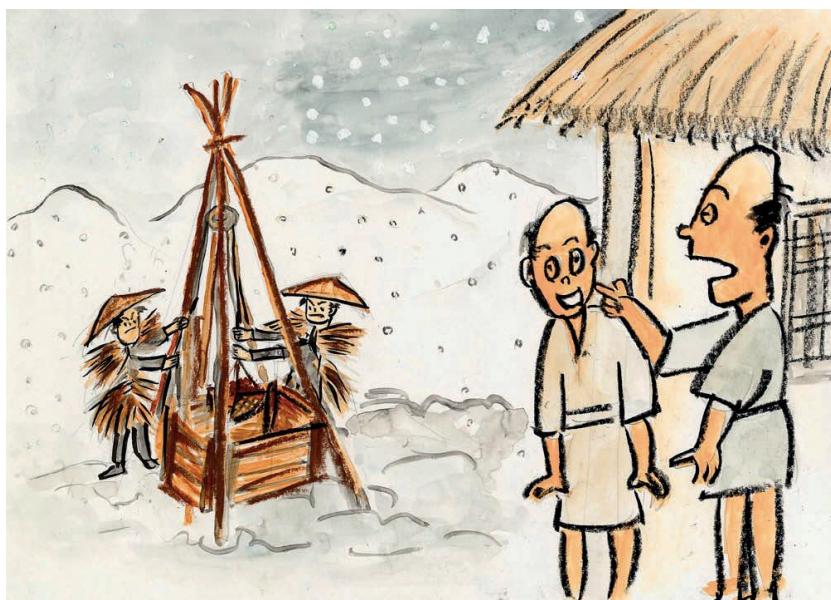
雨の降る日も、風の強い日も、雪が積もる寒い日でも、二人の姿を見かけない日はなかった。

「おお、今日も一人や掘つとるわ」「お金もかかるがに、たいそくなこっちや」

はじめは、感心していた人たちも、しまいには、

「あんなどうなことして」と、言ひ入る  
えでてきた。

それでも二人は掘りつづけた。けれども、どれだけ掘つても、お湯は出でこん。





わんなる口のひ。

「源助兄や、ひい、温泉屋のやまとひと  
思ひがや。じとだに掘つてや、温泉が出来る  
てやねえし。お金もみんな使うてしもつた。  
つりの者はみんな、そんなりないと やめ  
と聞つて・・・」

「わざなじておわづかれてや。わづか  
りつけの辛抱や。頬の「ひ」となだめたり、すか  
したりしたが、小平は頭を横に振るばかう。  
いひつて、薪水を貰ふの様子がない。

そんなことのあった夜のこと。

源助の枕元に、お薬師様が現れ、

「源助や、あきらめぬでないや。村の衆はお前の手でお湯が出てくれのを待つておるのだぞ。あきらめはこなつ。わひと、わひとつ掘り出るのだ。やつすひと、大根な石に掘り当たる。その石を取り除くがいい。わひとお湯がふき出してくるはずじゃ」と告げた。

源助は驚いて目を覚まし、周囲を見回したが、そこには、お薬師さまの姿も何もない。





次の日の朝、源助は暗いうちに起き、小平の所にとんで行って、お薬師やまのお告げの話をした。

小平は、何かにとりつかれた様子の源助に驚いて、源助兄の後にについていつもの所に行こうとした。

大きな石に当たったではないか。  
あらうといひだらう。  
そして一人は、こつもの11倍も、深  
く深く掘った。





「や

お物主の口や。お薬師様のいわれた通り

そして、その口をあわせおひと取り除くと

ショーツ

圓へ圓へお湯が噴きあがった。

こうして、一人の力で、村人たちの疲れをいやす楽しい場所がもどってきた。

二人はその近くに祠を作り、薬師如来の仏様を祀った。

それ以来、この温泉は辰口温泉と呼ばれ、この地の人ばかりでなく、遠く離れた土地の人たちの、樂しへつねに場所として今まで賑わっている。

絵・後 泰夫





これは昔鍋谷村なべたにの話や。

ある年のこと。

春から雨がよう降り続いて、夏になつても、  
雪でも降つたしそうな寒い日が、何日も何日も  
続いた。

田んぼの稻は、短く、枯れて白うなつて、  
細々と生えとるだけやつた。

「小田井、米、とれんがでねえけ

「食つせんな、なあもねえよになつた。腹へつて死んでしむうわ」「わ

「ヨヒ生えとる草食つとつて、腹はふくれん。

和氣の山の青土でも食わな、腹らくれんわ」「

「だらりなこと言つとんま。昔、小松で、土を掘つて食べたもんが、腹こわいて死んだといつ話、忘れたんか」「

「やつやつたなあ。前のああとのとせや、石川の方で、隣村へ麦の粥かゆをもうこに行つたもんが、山の坂道を越えようと思つても、腹、すことぬもんじ、上のじができる、道端で死んでしまつたといつ話も聞いたなあ」「





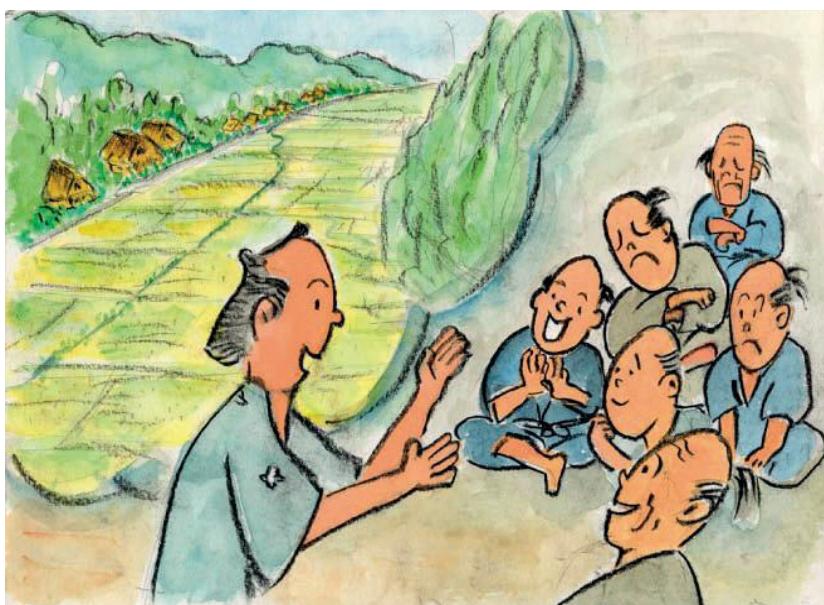
そんなんある田のいと肝煎の庄兵衛おやぢさんが、村の入らを集め、話しあじめた。

「今年も、ひどこさきんの年になつた。食う米どにひか、おかみ上に出す年貢米ねんぐもやつとのよつや。このまじや鍋谷の村も絶えてしまつ。それでや、皆の衆や、よう聞いてくれ。今より、少しでも田んぼを広げて作りや、米もよけえとれるし、年貢米出しても、くす米、だいもんくらいは残つて、食つひじべりにやつたりつかなるやひ」

「庄兵衛おやぢが、田んぼを増やすといつてや、鍋谷の村はまだかつて、いじに作るがや」

「へへ、へいへ、わしらが住ござる所を、  
田んぼにするがや。今、住んどるみんなの家  
は、向かいの北の方の山をへまして、そこに移  
すがや。へいへりや、家も、田当たりがような  
る。向年かかるかわからんけど、鍋谷の村を守  
るためや。じりや、みんなでがんばってみん  
か」

村人たちは、何が何やら分からんかったが、  
肝煎どんの話でもあり、今より食べるしがで  
あるといつて、だれも反対するものはない  
んかった。





庄兵衛さんは、お奉行様のところに何度も何度も足を運んで、新しくたんぽを開くためのお願いをしに行つた。

そして、やっとお許しが出て、村の西の端から順番に、山を崩して、新しく家を建てる家立ちの仕事にとりかかることになつた。

ドーン ドーン ドーン ドーン

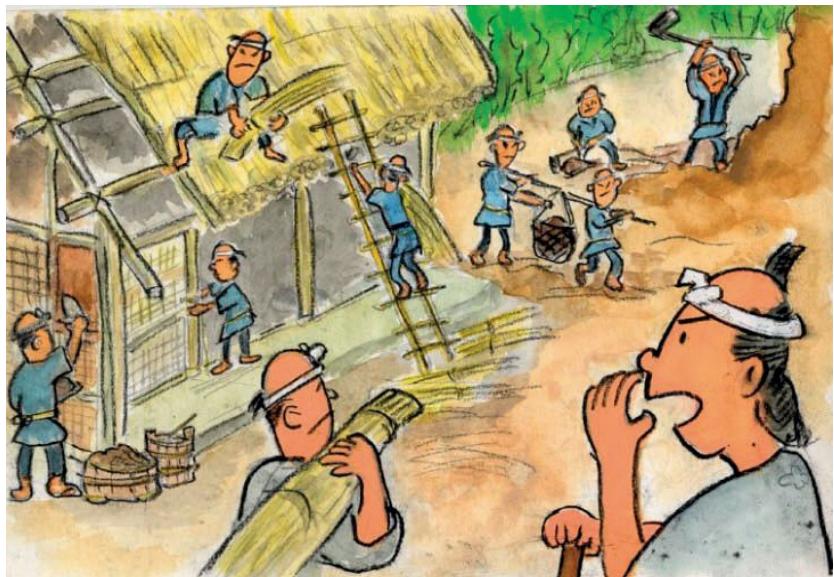
「あーあ、今日も、庄兵衛さんの太鼓をたたく音が聞こえる。今、山の仕事からもどつたところに、また出んな」

「あんた、肝煎様は親やと思えど、お上からもつて言われどるがいね。人夫に顔をださんだら、どんなきついお叱りうたるかわからん。ダメ作つておくから、はよう行つてくだされ」

庄兵衛さんのたたぐ太鼓の音を聞いて、村の男たちは、あちこちから、疲れた重い足をひきづりながら出でてきた。

「毎日出でると疲れるわ。たまには骨休めをしたいもんやなあ」





「庄兵衛さんも、たいへんないじを勧めだしましたもんや。いつになつたら太鼓の音聞かんですむんや。毎日、毎日、山仕事と家立ちの仕事で、身体が持たんわい」

村人たちの中には、不満を言つ者も出でました。

それでも、夜が明けると、すぐに太鼓の音がなり始め、朝前に、ひと仕事をして、昼間は、自分の家の仕事を早く終わらせてから集まり、日が暮れるまで、雨の日も、風の吹く日も、雪の降る日も、毎日、毎日、続けられた。

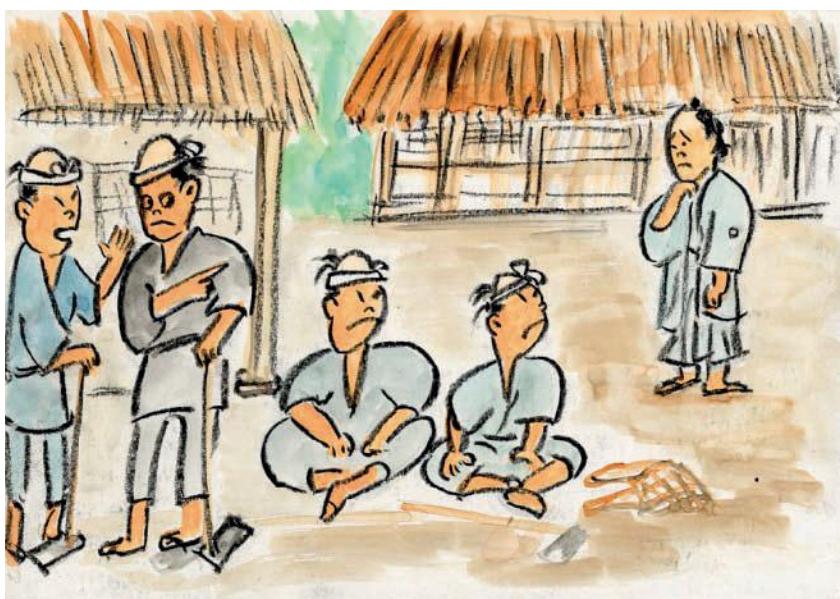
家立ちの仕事が始まつて、どれだけの月日がたつたことやわい。

「やつはひんないじとせうじうりや、父ちやんな倒  
れぬこ、米あ無くなつた。庄兵衛さんの言われた  
ことやじせうべ、なんぞうひが、じんなりい  
田にあわせなりんのや」

「庄兵衛さんは、自分の手柄じよひとつとい  
のんないこか」

「庄兵衛さんの家には、財産があるからいこ  
んじか、わしうは、毎日の食い米にも不自由し  
る。わしうのじとを向も考へといらんがんないけ  
」

「このまにか、庄兵衛さんの悪口を言つゝ者か、  
仕事を怠ける者がられてきた。」





それでも庄兵衛さんは、黙つて、村人たちの先頭に立つて仕事をした。

「困ったことになったもんや。ここで仕事をやめれば、何にもならん。なんとかせんなん。あのひどいききんの苦しみを、また村のもんらにわせるわけにはいかん」

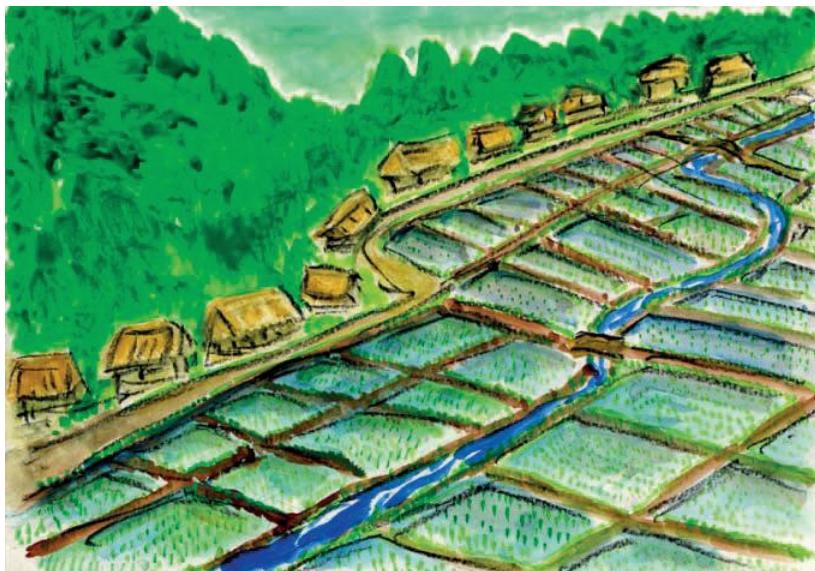
だれに言つわけでもなく、庄兵衛さんは黙々と働いた。

「庄兵衛じん、もう仕事続けられん。べず米  
ものになつて、家のもんな、何せか食つどりんの  
や」

「おう、やうやつたか。知らんかった。かん  
にんしてくれ。今、米を持つてくるやけ、家の  
もんに食わせてやつてくれ。もう少しの辛抱  
や、みんな、力をあわせてやつてくれ。頼んま  
いや」

庄兵衛じんは、食べ物ばかりでなく、仕事に  
使う道具や繩など、必要なものは、黙つて自分  
が買って、村の人たちに渡しどつたやうや。



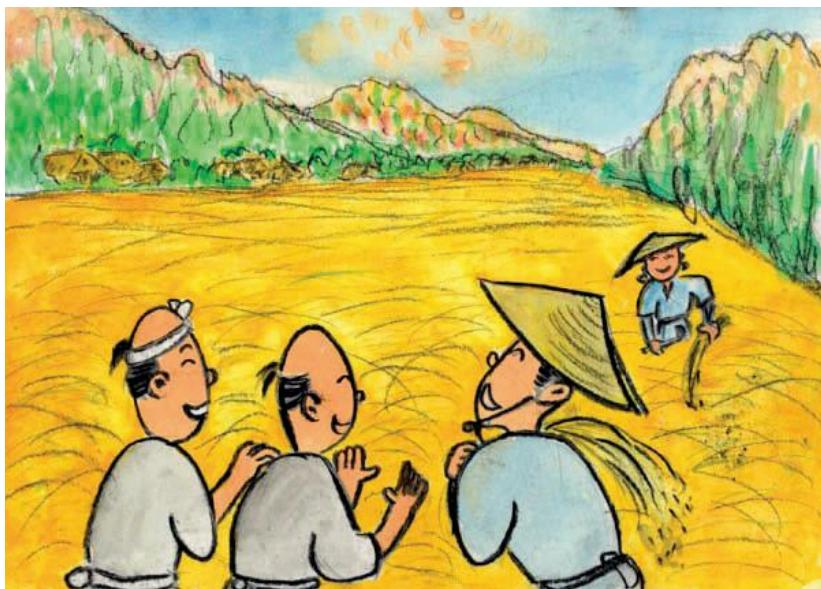


こうして家立ちの仕事が始まって十五年の  
月日がたった。

鍋谷の村のすべての家が山の北裾きたすそに移り、  
今まで、家の建っていたところはみごとな田  
んぼになつた。

それからといつもの、鍋谷村は、田当たりのいい場所に家が移ったので、病気になる人が少なく、洪水があつても、高い所に家があるので、家が流される心配もなくなった。

そして秋になると、広くなつた鍋谷の田んぼには、こがね いなほ 黄金色の稻穂いなほ が波打つていたそりや。





しかし、庄兵衛さんは、たくさんあった財産も底をつけ、ながねん長年の家立ちの仕事で体をこわし、六十三歳で亡くなった。

村人たちの悲しみはたいへんなもので、今まで文句を言っていた人たちも「庄兵衛さんは偉いお人やった」と言うようになった。

鍋谷の神社には、庄兵衛さんを祀まつったはこらが、鍋谷の家やたんぽを見守るように立っている。



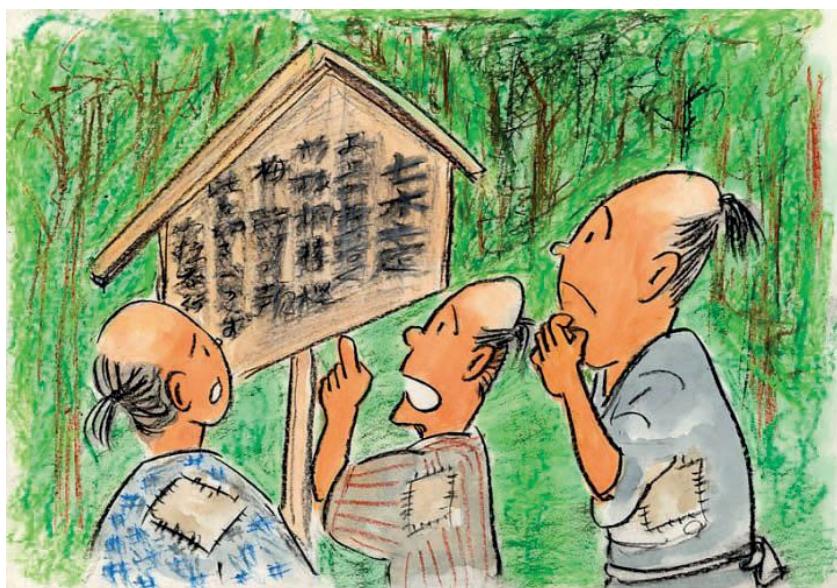
むかし、むかし、鍋谷なべたにの村に「きやちの源兵衛」という人がいた。

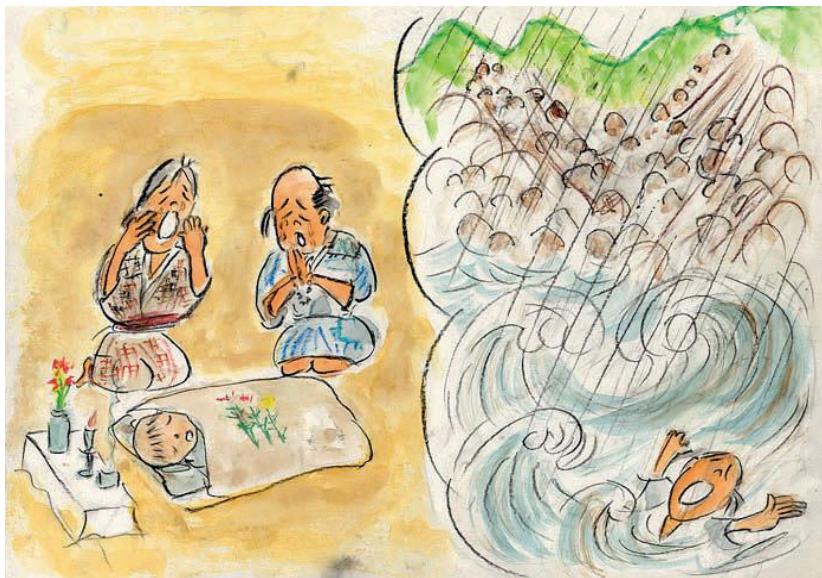
「きやち」やきはたというのは焼烟やきはたという意味で、自分の土地を持つていらない人が山の斜面で烟をするという、貧しいお百姓さんのことやつた。

鍋谷のお宿やんには大きな杉の木や松の木がたくさんあった。

江戸時代、前田の殿様がこの辺りを治めていた頃、七木の法度』といつおふれが出されていた。

マツ、スギ、キリ、ケヤキ、カシ、ツガ、カラタケの七種類の木は、自分の山の木であっても、許しがなくては、切ってはいけないというきまりだった。





今からおよそ一百年くらい前の天明三年のこと。

やうしたことか、この年は春からずっと雨が降り続いて、おでんと様の顔が見られる日など、ほとんどない、七月には洪水がおき、田んぼや畠は土や泥で埋まった。

食べるのもなくなり、村人は草の根をかじったり、蛙や蛇も食べた。中には、山の白い土まで食べ、おなかが詰まって死んだ人もいた。

あちこちの村では、体の弱い人や子供が、次々に死んでいったが、だれもどうかねじかできなかつた。

あゆ田のじと。村の人たちが、あゆ田と肝煎じんの家に集まってきた。

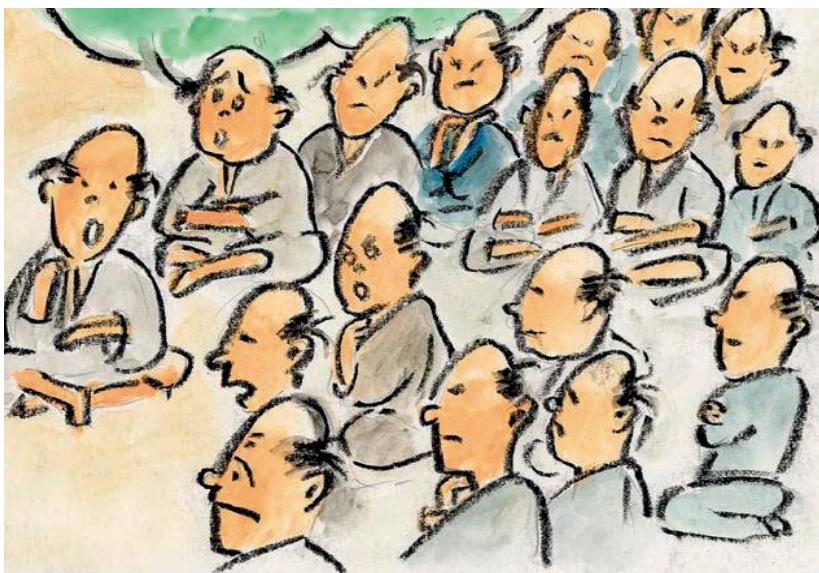
「肝煎様、こんなことでは、みんな死んでしまいます。病人もたくさん出たし、ゆうべも、源六のかあかがたおれたといひし、なんとかしなければ」

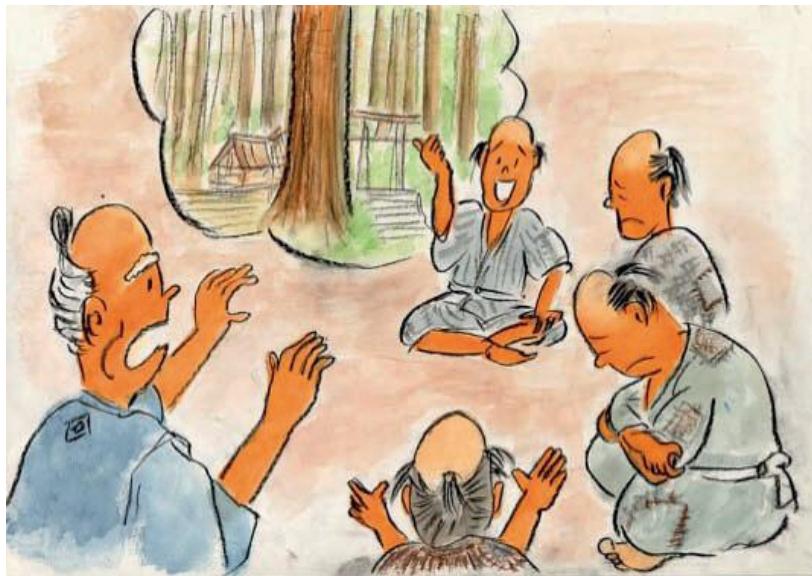
「草も食ったし草の根も食った。蛙も蛇も、それしぬ虫くらまで食つてしまひた」

「わへ、何も食べるものがのつなかつた」

「お奉行わまにお願いして、お藏の米を分けてもうらへり読にいさんのだらうかのう」

「はかな、そんな話を聞くよりもうべるはずがない」「たくさん的人が集まつたもの、誰もいに考へが浮かばない。





じ、そのじが、「あのお宮の大杉を切って、  
美川で食べ物にかゝる」としてやりやうやう  
か」とこう者がいた。

「そんなことをして、もしお上に知れたら、そ  
れじゃ死罪になるやー。」

「おそれのことを聞くついで、村中飢え死  
にやー生めるためには、やつあるしかない」

こうして村人たちは、決して他人(ひと)には  
言わないことを約束しあって、お宮の杉を切る  
ことにした。

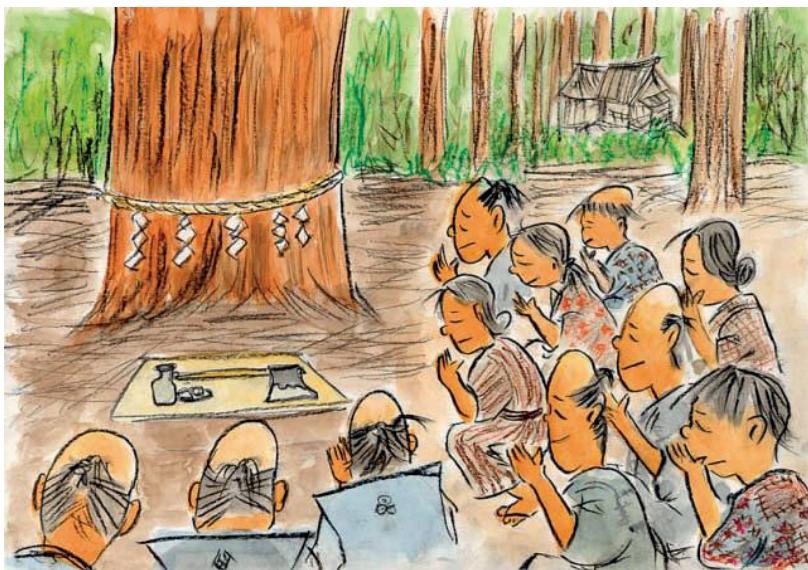
次の日、病人や子供をのぞいて、鍋谷中の人たちがお宮に集まつた。

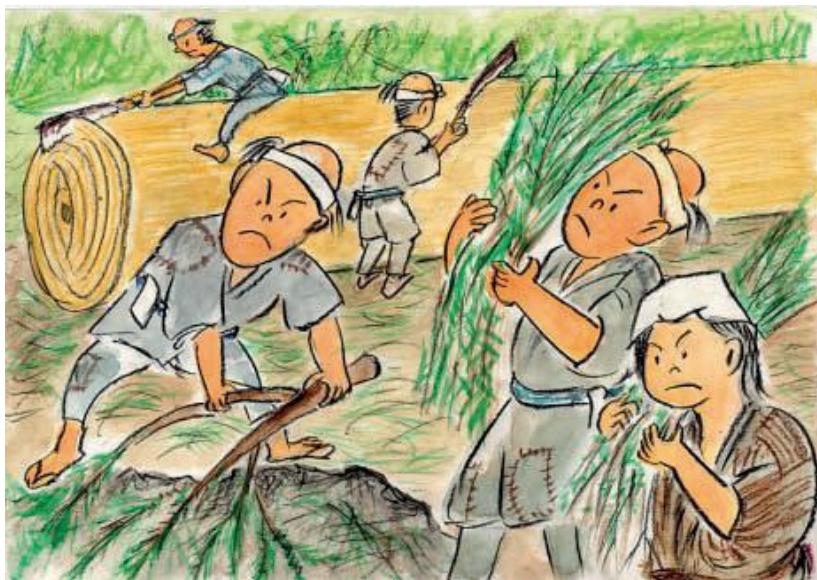
「どうか、木を切ることをお許しください」「みな、口々に言いながら、手を合わせお祈りをした。

カーン カーン カーン

神社一の杉の大木に、とうとうオノが入つた。どれだけの時間が経つたのか、ギシッギシッギシッ ギシギシギシ ギシギシと大きな音をたてて、大木は倒れた。

神社の前の田んぼを越えて向かいの山に先がかかるほど、見事な杉の木だった。





せつせく、だれに見られても分からぬよう  
に、切り株に土をかぶせ、落ち葉で隠した。  
小さな小枝も、一本も残らずそれが家に  
持ち帰り、あま（屋根裏）に隠した。

木挽<sup>こひ</sup>きは、木を板にひき、そして、夜の間に  
美川へ運び、食べ物とかえることができた。

といひのが、しばらぐたつて、小松の奉行所から、肝煎どんの家に使いが、書面をもつて来た。

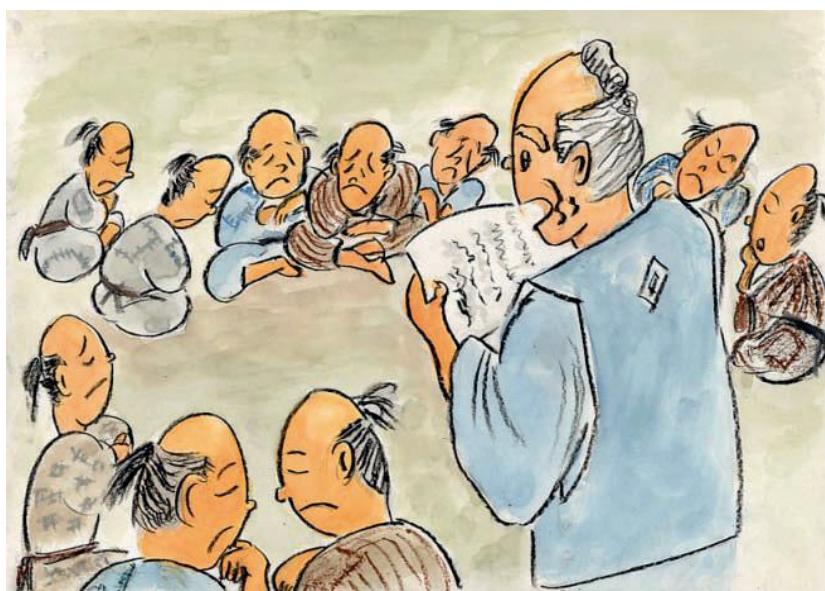
「今頃なんの知らせだい？」

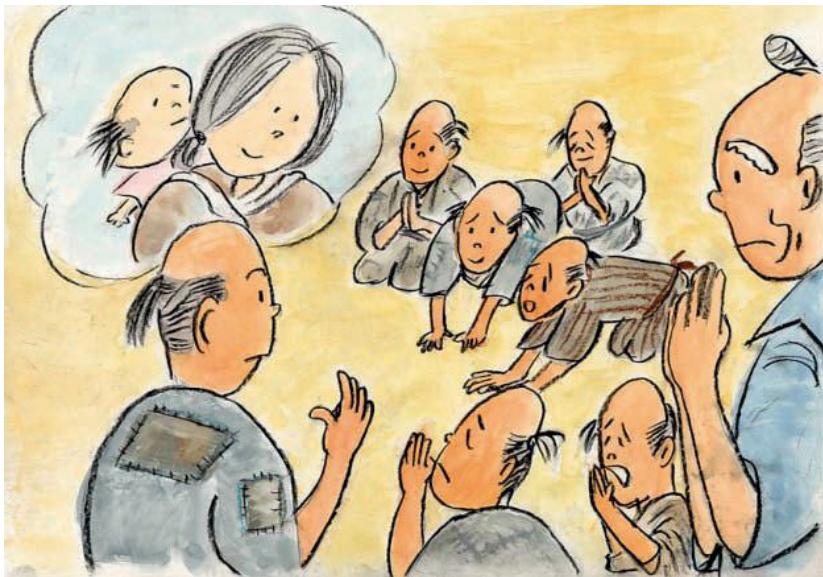
書面を読んだ肝煎どんの顔が、またたく間に、まつ青になつた。書面は

「鍋谷村で、お宮の木を届け出もなく切つた者がいふと聞く。近く役人が出かけて調べる」というものだつた。

肝煎の知らせで、村人たちは大急ぎで集まつた。相談は三日三晩続いたが、よい考えなど出のはずもない。

みんな肩を落とし、聞ひ入るものは深いため息ばかりだつた。





いよこの役人が来るといつも、夜明け近く、今まで隅の方で黙っていた、さやちの源兵衛が急に立ち上がった。

「こつまでもじんなじとつてむだぢやかん。

罰はつり一人で受けねやか、こじあひとつ、うひりまかこじやかえんか。ただ、うひりむ、かかあや子がおる。うひがのうなつたあと、あひのいこと、頼んねす」と申し出た。

頭だまってしまつた。

けれど、もうじき役人が来る。  
だれ言つとなく

「頼めるいことではないが、お願ひ申す。かかあや子供のいことは村中で引き受けぬ」  
といふことになり、源兵衛は泣き声になつた。

いよいよ夜が明けた。

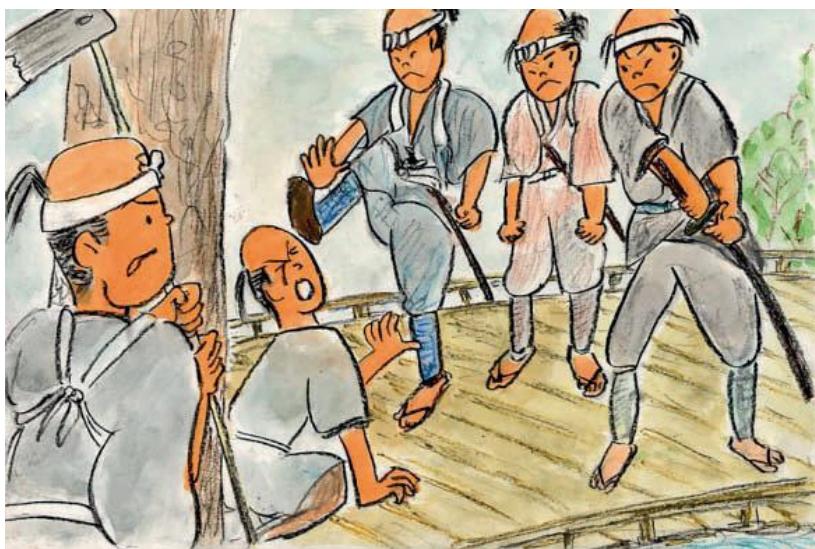
源兵衛は「折橋」のたもとの草むらに身をおく、役人が来るのを待った。

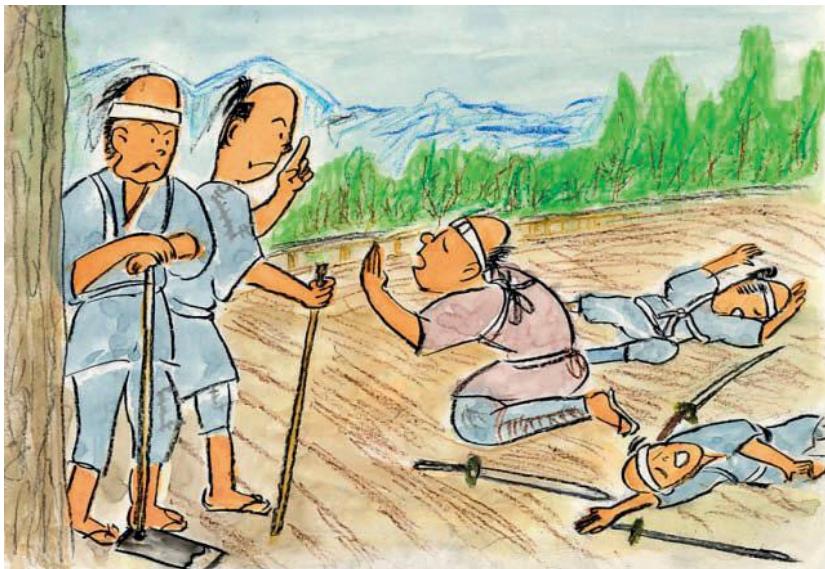
しばらくすると、三人の役人が折橋にやつて来た。

源兵衛はすかさず、役人の前に出て、道に頭をすりつけて

「どうかお目にぼしを、生きるために私がやつたのです」と願い出た。

役人は源兵衛を足で蹴り、刀に手を掛けた。





このとき、近くに潜んでいた権兵衛ごんべえが走り出で、持っていた鍬くわで役人を打ちすえた。

源兵衛も他の一人の腕をしめあげ、地面にたたきつけた。

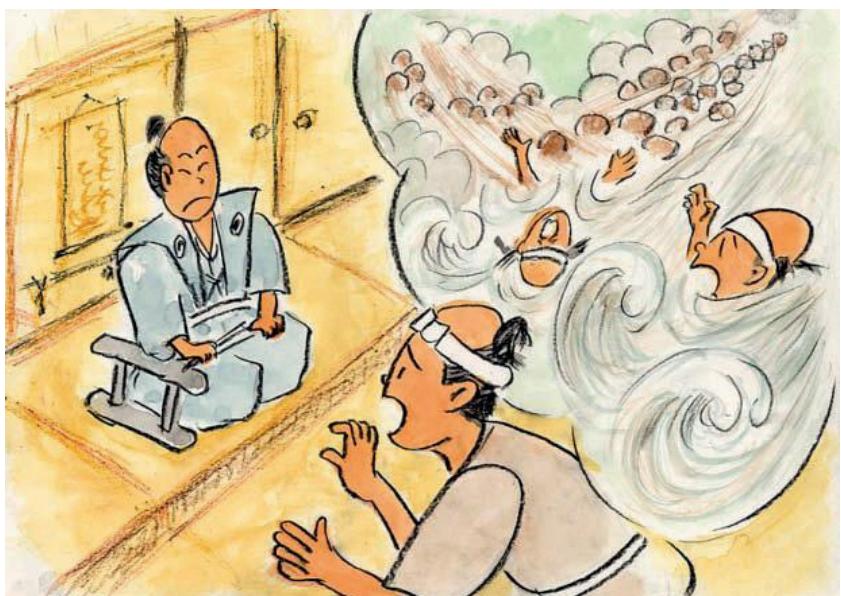
目の前で、連れの二人が倒れるのを見た残る一人は、手をすり合わせ命請いをした。

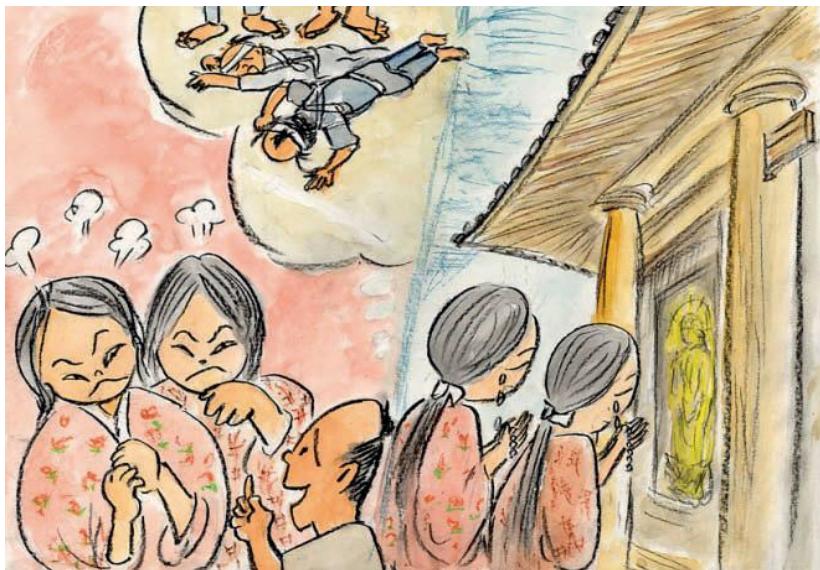
あわれと思った源兵衛は、決してこのことを他に言わないことを誓わせて役人を返した。

奉行所に帰った役人は

「鍋谷といつといひは、とても山がけわしい  
といひで、途中でかけ崩れにあい、二人は川に  
落ち、行方が分からなくなり、私一人がやつと  
助かったのです。取り調べをしましたが、ご法  
度を破った様子はありませんでした」と報告し  
た。

そして、亡くなつた一人の役人の奥方に、奉  
行所で話したことと同じことを話した。





それから一年が経ち、主人を亡くした二人の奥方は、毎日涙にくれ、連れだってはお寺参りをし、旦那の冥福めいふくを祈っていた。

そんな一人の姿を見て、生き残った役人は源兵衛との約束を破り、ほんとうのことを話してしまった。

それを聞いた一人は、驚き、すぐに奉行所に訴えた。

奉行所から役人がやってきて、源兵衛と権兵衛を召し捕り、村人も厳しい調べを受けた。

みんな、初めの約束のどおり、何も知りませんと言った。

奉行所では一人の厳しい取り調べが続いた。

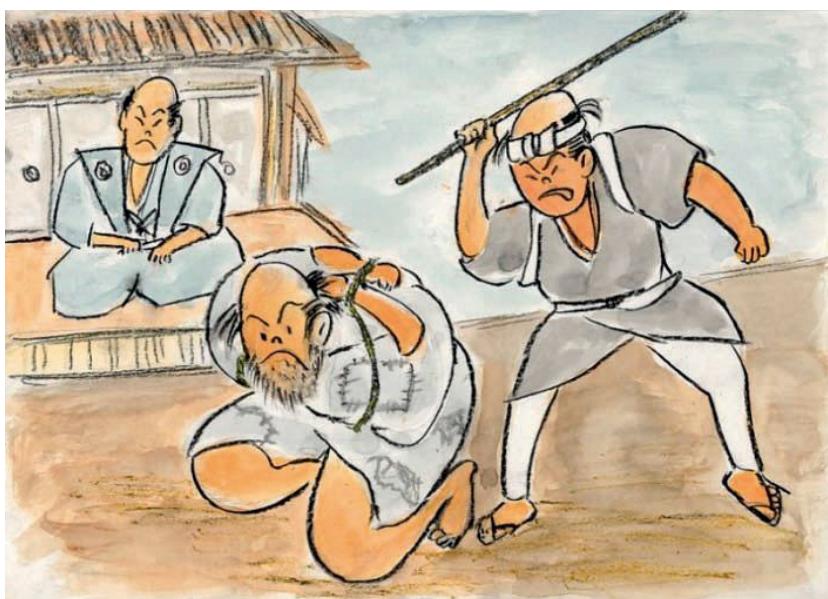
権兵衛は石責め、水攻め、百たたきなど、どんなつらい拷問にあっても

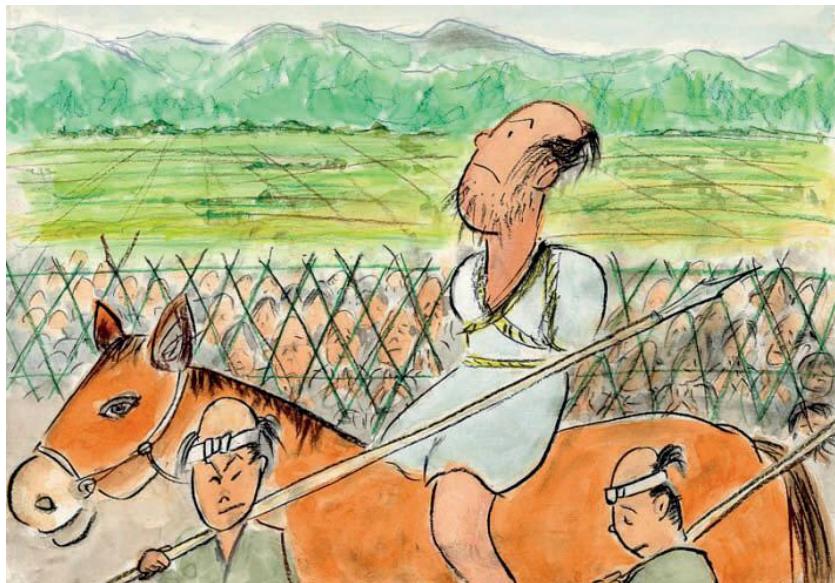
「あの日、私は一日一日おひて、夕方、山から一人で帰つて来たので何も知りません」と言い続けた。

やがて許されて牢からだされ、村へ帰ることができるた。

一方、源兵衛は

「木を切つたのは私です。私一人で切りました。役人を殺したのも私一人です。どのようにお裁きでも受けます」と頭を下げた。





「あれほどの大木、おまえ一人で切れるはずがない他にもいるだろう。白状しろ」と、厳しい拷問を受け、責められたが、源兵衛はただ「私一人です」と答えるだけだつた。

ついに源兵衛に、死罪しざいというお裁おはきが出た。はりつけの源兵衛は、はだか馬に乗せられ、小松の町をひきまわされた。

ひげは伸び、やせ衰おとろえ見るもあわれな姿になつた源兵衛は、ずっと目を閉じたままだつた。今江の刑場に着いたとき、源兵衛は目を開き、東の方の鍋谷の山を見やり、また静かに目を閉じ、竹矢たけやらい來の中に消えて行つた。